ガロ名作劇場

池上遼一インタビュー

▽貸本→『ガロ』入選→水木プロへ

——今回の名作劇場で、『ガロ』からデビューされた有名作家を代表して、矢口高雄先生と池上遼一先生に作品の再録ではなく当時の事、『ガロ』についてなどお話をお伺いしようという事でお願いしております。お忙しいところ恐縮ですが、お願いいたします。

池上 はい。今ちょっと風邪ひいちゃって、調子悪いんですが……。

——こんな時に申し訳ありません。…池上さんは福井県のご出身ですが、大阪にいらした当時貸本漫画を描かれてたとお聞きしたんですが。

池上 要するに高校行きたかったんだけれども、親父が倒れたもんだから、就職という事になって、学校の斡旋で大阪の看板屋を紹介されたんですよ。その前から貸本漫画が好きで、「日の丸文庫」とかよく読んでたんですけど、住所みたら大阪で、（その看板屋の）すぐ近くだったんで「こりゃいいや」ってそこへ就職したんです。それですき見ては自転車でうろうろ探してたんですよ。「日の丸文庫」を。そしたら小さいボロボロのビルがあって（笑）、それ見つけてから休みの日に通ったりとか、仕事の途中にちょっと寄ったりとかしてたのね。そういう時に水島新司とか影丸譲也とかね、ああいう先生がまだ学生服着たような状態で居ましたからね。

——へええ…そうするとつげさんを知ったのは…。

池上 つげさんを知るのはもう少し後ですよね。僕が二十…一、二の時だから。つげさんの作品はずっと読んでたんですけど、お目にかかったのは水木プロ行って初めて…偶然つげさんがそこで手伝ってられて。

——以前『ガロ曼陀羅』ではつげさんの「初茸がり」を読んで衝撃を受けた、と書かれてましたけども……。

池上「初茸がり」が最初ですよね、『ガロ』で読んだのは。それまでは貸本でミステリー物とかやられてましたからね。時代物とか。

——池上さんが『ガロ』に作品を発表されるきっかけになったのは、やはり「初茸がり」を読まれた事ですか。

池上 まあつげさんが描いてたという事もありますけど、それよりも何よりも看板屋辞めたかったし、「日の丸文庫」に描かれてた人達も皆東京へ進出してましたからね。さいとう・たかをさんとかね。でその前に看板屋辞めて、当時の貸本漫画で皆さん知らないだろうけど岩井しげをさんとか鈴木光史さんのアシスタントやってたんです。それで結局彼等にも仕事が無くて食えなくて、また看板屋に戻ったりしたんだけれども、とにかく漫画家になりたいし、結局看板屋にいても仕事面白くないってんで、あせってたんですね。で、そういう中でつげさんなんかは判らないような漫画『ガロ』に描いてるし、じゃあ俺の漫画でも『ガロ』の取って

くれるのかな、と思って送ったのがたまたま入選した、と。それを水木先生がたまたま見ておられて、「漫画家になりたいんだったら手伝いに来ないか」という事で、もう躊躇なくパッと出てった、という事ですね。

——それが昭和41・2年頃ですか。

池上　そういう事ですね。

——いろいろな方からお話を伺っていると、水木先生のところでアシスタントをいろいろな方がなさってたんですね。若手作家たちの一種サロン的なものになっていたような感じですけども。

池上　そうですね、僕は大阪に長く、商人の町にいたせいか水木先生のところにいた時は、仕事忙しいんだけどあの先生はああいう性格だから、自由な感じしたね。自由感、というか。

——バックの指示もなく判断で入れてった、というような話がありました（笑）。

池上　そうそうそう。それに怒らないしね。大阪にいた頃は何かこう…先輩から言われたりね。

——わりと「上下関係」とかうるさかったり…。

池上　そうね、だからそういうのと比べると天国のようだったね。それに新鮮だったしね、僕の好きな世界の作家なんかが出入りしてたしね。石川球太さんが僕好きだったんだけどひょこっと遊びに来たりね。まずつげさんがそこに居た、というのが物凄く新鮮だった…というか感激だったね。

——どういった作品を手伝われてたんですか。

池上　そうね、あれは…講談社で「ゲゲゲの鬼太郎」やってた頃かな。つげさんが手伝ってたのは。それと、『ガロ』の「鬼太郎夜話」みたいなものを単行本からガロ版に直すのはつげさんやってたから。描き直しみたいな、構成とかを。

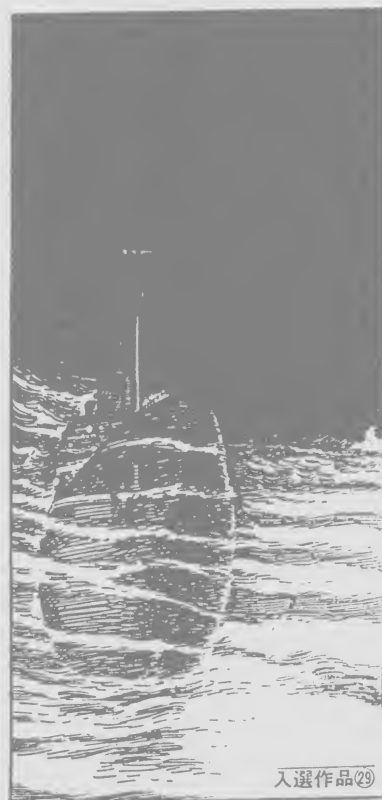
——あの当時の「鬼太郎」シリーズは錚々たる顔ぶれがアシスタントをされてたわけで、読者の方としてはこのタッチは誰だろうとか、この絵は誰が描いたんだろう、といった推理をする楽しみ方もあるんですよね（笑）。

池上　（笑）そうかも知れないね。もうあの当時は目玉くらいじゃないかな、水木先生が描いてたのは。あとはほとんどつげさんが人物まで描いてたんじゃないかなあ。僕はもっぱら背景専門で描いてましたしね。

■「ガロ」66年9月号入選作となった「罪の意識」。

▽原作付きで商業誌へ

——池上さんは66年9月号『罪の意識』で入選されて、72年の『おえんの恋』まで『ガロ』誌上で作品を発表されてるんですが、その間長井さんとは個人的にはお付き合いはあったんですか。

池上　いや、わりと商業誌で連載やるようになってからは忙しくなっちゃって、それからは会ってないですね。たまに水木先生の会なんかで会った時なんかはもちろん話してますけどね。長井さんは僕が商業誌に進出したのを喜んでくれましたからね。要するに「うちでやってても原稿料払えないし、『ガロ』は階段のようなつもりでやってくれたらいいんだ」、というような言い方されてましたから。

——それは矢口さんもおっしゃってました。やはり長井さんは「生活」というものを考えてくれてたから、という事で。

池上　そうね、それに僕の場合は最初話したように親父が中学一年くらいの時に結核でブッ倒れちゃったからね。生活保護の生活が続いたんですよ。お袋一人でしょ、それで妹が下にいたし、僕が早く働いて仕送りしてたんですよ。水木先生のところへ行く時も、当時…看板屋では一万円くらい貰ってて、五千円くらいは仕送りしてますけど、仕送り出来るくらいは貰えますか、って聞いたんです。そしたら一万五千円くらいなら出すよ、という事で。だから親の面倒見てかなきゃならないというのがあったからね、どうしても『ガロ』だけで描いているというのは自分自身でも怖かったし、早く親を楽させたいな、というのがあったから。

——やはりその当時『ガロ』から外

『罪の意識』より。

に出られた方というと、やはり経済的な理由、またもっと大きなフィールドで作品を発表したいという事、さらに『ガロ』に自分の作風が合わなくなったとか……。

池上　いろいろなタイプがありましたよね。だからそういうところから見たらつげさんなんかは凄い人だな、と思いますよね。僕自身にしてもつげさんが持ってるようなストーリー作りの才能があるとは思ってませんでしたからね、当時から。

——先生の場合はメジャーに出られてからは、原作付きのものが多いですよね。

池上　僕の場合は自分で作るとなるとどうしても昔でいえば「ガロ風」というか暗いものになっちゃって、商業誌では取ってくれない。じゃあ原作付きでやりましょう、と。で僕のオリジナルだと絵柄とストーリーが合ってないと言うことでね。

——それで絵の方も意識的にそういうストーリーに合わせて変えていったという。

池上　そうですね。

——でも初期の頃の作品は、要するに池上さんのオリジナルのものは精神的な、心の内面とか、あるいは社会的なテーマを扱っていましたよね、「夏」とか「地球儀」にしても。

池上　そうね、まああの当時の雰囲気に影響されてたのか、それとも年齢的なものか判らないですけどね。

——ご自身としてはそういう話が好きだったから、という事ですよね。

池上　そうですね、好みが…暗いのが好きだったから、当時ボードレールとか萩原朔太郎とかね。自殺志向みたいな、今でいえば鬱病的な作風ですよね（笑）。

——それから、72年の「おえんの恋」の頃はもう商業誌に作品を描かれてた訳ですよね。

池上　そうです。というより商業誌やめてしばらく遊んでた時なんですよね。僕が好きなのは、やっぱり「地球儀」とか「夏」とかそこら辺ですよね。自分では「おえんの恋」は好きじゃないですよね。

——やはりあの当時読まれてた方には「夏」などは特に鮮烈な印象を与えたようですね。…商業誌で描くにあたって、先日伺った矢口さんのお話では、最初梶原一騎さんに当てられて、ずいぶん苦労されたようですが（笑）、原作付きという事で先程絵柄を変えられた、という事でしたが他にご苦労というか、そういったものはありましたか。

池上　うん、そうですね、僕の場合雁谷（哲）さんに巡り合うまでは原作でやってもピッタリとそんなに乗れるものは…ああ、そうか、「スパイダーマン」で平井和正さんと会って割りと乗れるなあ、いいなあ、と思いましたね。それまでは原作でやってて気持ちが高揚するというか、そんなに乗れるものはなかったですね。「スパイダーマン」は内面をグイグイ、と抉るようなものを書いて来ましたからね。

——普通のSFとは一風変わった感じでしたよね。

池上　人間の情念とかどろどろしたものをね。こういう気持ちをこういうシチュエーションで描けるのかな、という勉強にはなりましたね。

——それで池上さんといえばやっぱり大ヒット作「男組」ですよね。

池上　そうですね、「男組」はまあ、何て言うんだろうね、平井先生とは別な面で伸び伸びやれたな、というか。

池上　原作といっても「ここをこうしろああしろ」とカッチリとした指定が無かった、という感じですか。

池上　指定はあんまりないですね。ただ描いてる本人が意識している以上に人気が出て来ちゃった、というのがあったもんで、こちらも乗ってきたという事はありますよね。平井先生みたいな内面を書いてきてる訳じゃないんだけど…だから商業誌ではあんまり内面を書きすぎると人気が出ないんですよね。「スパイダーマン」もあんまり人気がなかった。

——いや、でも平井・池上コンビの「スパイダーマン」といえば今でも語り草になってますよ、本当に。

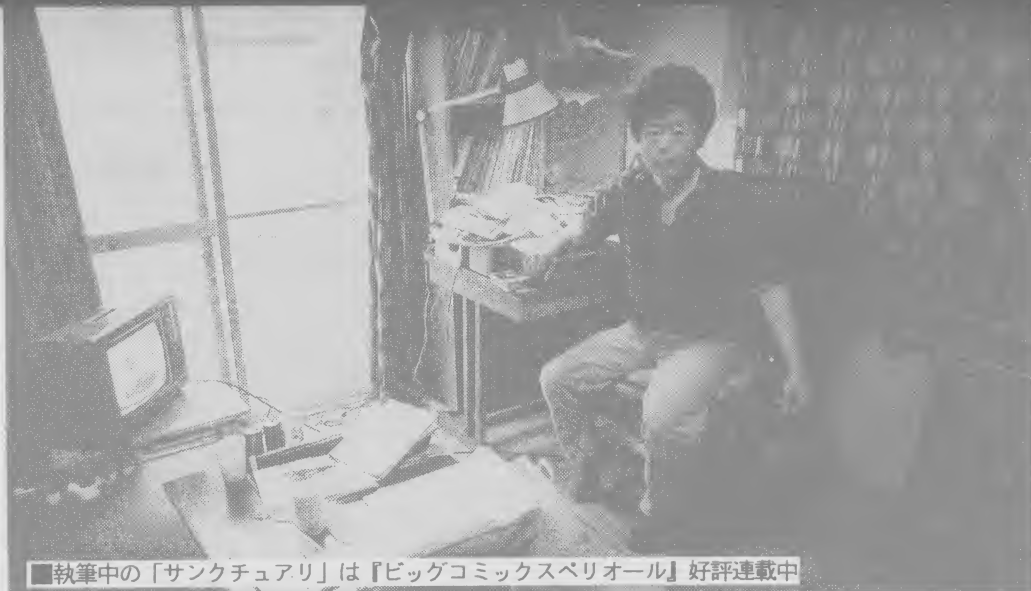
池上　（笑）だから結局マニアックに終わっちゃうんだよね。

——では「男組」というのが商業誌でのエンターテイメントでは成功した、という。

池上　そうですね、成功したと言えるでしょうね。それで、僕の絵のパターンというのがだんだん仕上がってきたというか。それと平行して「アイウエオボーイ」というのをやってたから、小池さんと。だから構図とか、映画的な演出方法というのは物凄く小池先生に負うところが多いんですよ僕の場合。小池先生の原作というのは割りと指定が多いんです、細かく。あの先生にはそういう映画的なノウハウを教えて貰ったんですよね。

▽「格好良く描く」のが僕の「華」

——メジャーなものと、マイナーなもの、例えば昔『COM』と『ガロ』を安直に対比させたように、そういう分け方があると思うんですが、池上さんはどのようにお考えですか。

池上　僕自身でメジャーとマイナーというのを決めてるのは、『ガロ』の場合は救いの無い終り方でも十分やっていけるんですよね。でも商業誌の場合は救いがないと、希望を持たせるような部分がないと駄目なんですよね。僕なんかはストーリーに参画してるわけじゃないですけど、要するに日本人を格好良く描きたいわけですよ。僕の漫画が東南アジアなり韓国なんかで受けてるのは、アジア人ってのは格好いい奴が少ないんだよね。ある種のコンプレックスを持ってて、そういう願望を描いているつもりなんですよ。美女にしてもね。日本人なんかにそんなに美

■執筆中の「サンクチュアリ」は『ビッグコミックスペリオール』好評連載中

■「風邪で口のまわりが真っ赤になっちゃって…」とアップの撮影は勘弁、との事

女にしても美男子もいない、だけど漫画の中には居て、白人と対等に闘ったりやり合ったりして、今回やってるヤクザ漫画にしても、ヤクザにこんな格好いい奴はいない、というのは無視しちゃって、いや実はこんな凄い奴がいるという描き方してる訳ですよね。それ自体はやっぱり僕自身に合ってると思うんだよね。というのは僕自身がそういう願望持ってるから。華奢な体で虚弱だし、格好良くて力強い奴に憧れてますからね。それをそのまま絵に描いてるだけだから。

——読者も感情移入しやすいというか。

池上　考えてみるとね、香港にこないだ行ったら、コミック読んでる連中というのは道路で飯食ってるような、労務者なんですよ。ジーンズのポケットに薄っぺらいのを丸めて入れて。だから、生活に苦しいとか何か、希望を持てない連中が読んでるんです、僕の漫画なんかは。今の日本ではあんまり人気無いんですよ（笑）。結局もっと若い人の方が人気ある訳で。逆に発展途上国というか、そっちの方が僕の漫画見て、ああ「東洋人格好いいな」とか、「欧米人に負けないな」とか希望を持ってくれてるんじゃないか、と感じるんですけどね。

——いやでも、日本でも人気でしょう。

池上　要するに格好良く描く、というのが僕の「華」なんで、その部分でやっぱり日本でもそういう願望持ってる人が居るんでしょう。

——そういう中で今描かれてるヤクザのお話というのも…。

池上　僕は、別な見方するとかじゃなくて、僕自身大阪に居ましたから、回りはほとんどヤクザでしょ。肩張って生きてますけど、弱者なんですよね、彼等は。今回の暴対法でも、市民の側に立ってと言ってるけど、そりゃ直接迷惑してる人も居るけども、結局単にいじめてるみたいな、というかね。安部譲二も言ってるけど、町から追っ払ったって結局他の町へ行く訳でしょ。「サンクチュアリ」やってて、原作の人とも話すんだけど、今の新法やると余計怖くなるんですよね。地下に潜るでしょ。マフィア化する。外国人が今一杯来てるから、彼等と組むと物凄く怖いですよ。コカインでも何でも平気でやっちゃうし。それで人間なんて落ち零れなんて無くならないでしょ、どんな社会でも。それが個々にグループ作って地下に潜ったら余計手がつけられないと思うんですよね。だから警察って何考えてんだ、と思いますよね。

——先程アジアの人々に希望を与えてるというお話がありましたが、そういう意味では今暴対法で不当に弾圧されてるヤクザに希望を与えてるのかも知れないですね。

池上　僕はヤクザに知り合いいないし関われば怖いですけど、ヤクザ嫌いじゃないんですよ（笑）。東映の映画みて好き、という程度ですけどね（笑）。

——日本人、特に男はそういうところありますよね、戦争はいかん、だけど戦車とか戦闘機好き、とか（笑）。

▽人間の複雑な気持ちを描きたい

池上　あと、一つは救いの無いものは好きなんですよね、ドラマとしては。リアルにポーンと切り捨てちゃった話の方が。

——『ガロ』の最初の頃のような、読み終わった時に読者の方が「うーん…」と考えさせられちゃうような…。

池上　だから僕なんか商業誌で救いのあるような、ハッピーエンドで終わるような話描くけど人気も出ないしね。自分でも描き終わったら投げ捨てたくなるぐらい嫌だもんね。好きじゃないですよ。嘘くさくてね。

——その辺がメジャーとマイナーはある程度天賦のものがあるのではないか、という矢口さんのお話にもあった、どうしても自分の中にあって変えられないものというか。

池上　僕はどっちかというと、不条理みたいなものをテーマにしたい方だから、例えば人間の持ってる「業」とか、そういうところから絶対に逃れられない、というような、そういうものをテーマに描きたいんだけども、商業誌ではそれをうまく脇のキャラクターを明るくして、とか出来ればいいんだけど

して休息をとるようにしました。仕事は楽しくやらないとね。

——苦痛になってくるとまずい、と。

池上　自分が好きで原作者に恥をかかせないようにある程度売れる作品が描ければその方がいいな、と思ってるから。

——じゃあそのうち昔の『ガロ』の作品のように本当に描きたかったものとかを…。

池上　ええ、時代物とかもやりたいしね。

——その時は是非、なんて…。最近の『ガロ』で若い作家の方なんかにはどういう印象をお持ちですか。

池上　やっぱり白土さんとか水木さんつげさんが止めてからはそう変わってないと思いますけどね。いろいろな若手の感性というものは。

——ああ、なるほど…そうですね。

池上　だからオーソドックスな作品が無い、という事だけでね。

——それは先日矢口高雄さんも、ちょうど「カムイ伝」が終わって、まあ後半重複してますけども、林静一さんとか佐々木マキさんが出てきてから今の『ガロ的』と言われる部分が定まってきたのではないか、とまさしく同じ事をおっしゃってました。

池上　何かほら、昔の『ガロ』って商業誌に近いものがあったんじゃないですか。「カムイ伝」という柱が一本あって、他に判りにくいものがあっても読者は読んでくれるというか。今はけっこう感性優先のものが主流になっている、というだけで。

▽「ヘタウマ」について

——池上先生というと、やはり物凄いデッサン力というか、絵の魅力が大きいと思うんですが…。

池上　もともと映画好きだからね、小池先生と組んでから、表情の指定が多いんですよね。どうしても作品の内容に合わせるためにはリアルにしていかなきゃならないな、とやってるうちにどんどんリアルになっていって、そのうちに池上遼一の絵はこれだ、という事になっちゃってね。読者が決め付けて来ちゃったから、それをうまく変えて行くしかないよね。

——じゃああの絵というのはご自分で変えて行かれた結果だ、という事ですか。

池上　ええ。そうですね。

——先程「カムイ伝」終焉後の『ガロ』から大体今の『ガロ』まであまり変化は無いとおっしゃられましたが、その流れのなかからちょっと前の『ガロ』になってしまいますんですけれども、いわゆる「ヘタウマ」というジャンル(?)が出てきましたよね。それに関してはどう思われますか。

池上　僕は時代的な流れの中で当然現れるジャンルだと思うんですよね。形が固まってくるとそれを崩したものが出てくる訳で、例えば今の日本だって、戦後崩れて、それがさらに経済成長して固まってくるとそれを崩しちゃえと、そういうものが出てくる訳で。既成の価値観を崩しちゃって、それを笑いに転化するというか。だからまた何年かすると「もうちょっとまともに生きましょうよ」という時代が必ず来ますよ、絶対。一時パロディが流行りましたけど、パロディだってちゃんとしたものがあって成り立つ訳で、ああいうものばかりになると、今度まともなものが恋しくなってくるし。TVドラマにしたってだんだん硬派なもんが出てくると言われてるし、今トレンディドラマとか何とか言われてるけども。

——昔の「白い巨塔」とか「赤いシリーズ」のような、きちっと構成された…。

池上　それをどう今の時代、若い連中に合わせて演出するかだろうけど、繰り返しのような気がするんだけどもね。また純愛が流行って、でそんなアホらしいもの崩して笑ってしまえ、とかね。それ程奥深いと思うんだよね、生の問題にしても、人間が存在してるという事は、笑う事もできるし、まともになることも出来る。例えば戦争があって生きる事に必死になってくるとある種まともな価値観が出てくるんじゃないですか。哲学にしても何にしても。今日本でPKOとかいろいろ言ってるけども、まだ実感としてないんじゃないかな。と思いますけどね。白土三平氏が「カムイ伝」やってた頃は「日本ってこれからどうなるのかな」って必死で考えてたもんね、学生は。新宿行ってもどこ行っても。唯物論の本とか読んでたもんね、電車の中で。「マガジン」と一緒に。日本の行く末がどうなるのか、って真剣に考えてたでしょ。だからやっぱり漫画もまともだったもんね。ここ何年かのある種の荒廃…思想的な荒廃みたいなものがやっぱり飽きられてくると思うんですよ。日本人って根が真面目だから。そういう意味でギャグも変わってくると思うんだよね。

——今のお話で吉田戦車さんなんかはそういう事を見越して昔の道徳の本から全く手を加えずに自分の絵で漫画にする、という実験を『ガロ』で初めてますから、勘のいい人はちゃんと解ってられるんでしょうね。

池上　やっぱり「知的欲求」というのはどんな読者にもあると思うんですよね。それと結局経済に由来してると思いますね。経済的に豊かであれば変わって行かないと思いますね。でも今バブルが崩壊して、景気が後退していくと「真面目にやってかないと生き伸びて行けないな」と、きつくなってくれば変わってくと思うんですけどね。

■「以前、著作権の問題があって以来、必ず自分の絵は自分で写真を撮ったのを元にしています」「サンクチュアリ」の格好いいヤクザは池上先生の顔から生まれているのだ！

実力が無いからそれがうまく出来ないだけであって。やれればメジャーでもそういうテーマでやれると思うんですよね。近松文学の「心中天の網島」とか好きですよね。心の中では「こんな事しちゃいけない」と思いながらも結局は女郎と道行きして行く、というようなね、ああいう世界が好きなんですよね。

池上 やっぱり水木先生のところにいた頃なんか、ちょうど時代が時代で、ドストエフスキーとかああいったものをじっくり読めたんですよね。まだ若いし。「罪と罰」とか読んでると、目的地に行く途中まで、「絶対あんなところ行かない」とその瞬間まで思っていながらさ、スッとドア開けて入って行っちゃうとかいう世界が多いんですよね。ああいった世界が好きなんですよね。大体夫婦なんかでも、喧嘩して、物凄い口論しながらでも頭の中で「抱き締めたい」とか考えたりしてるからね。人間のそういう複雑な気持ちがうまく描けたらいいですよね。林静一さんなんかは「赤色エレジー」でそういうところをうまく描いてるよね。

――人間の葛藤とか逡巡するさま、というか…。

池上 もう今の時代はあんまり無いのかも知れないけど、そういう不条理な世界が好きなんですよね。

――「地球儀」でもドラマ仕立てが不条理劇を観るような、緊迫感みたいなものが読み手に伝わってきますよね。

▽鈴木翁二さんのこと

――お話戻るようなんですけども、『ガロ』で描かれてた頃というのは、作家でいうとどういう方達と交流がありましたか。

池上 作家でいうと、楠勝平さんですか。あの人はライバルというか、そんな風な感じしてましたけど。あとは、僕が水木先生のところを辞めてからですか、鈴木翁二さんとか安部慎一さんとかね。よく一緒に呑みましたよ。凄かったですよね（笑）。

――よく呑みに行ったんですか。

池上 あんまり好きじゃなかったんだけどね、翁二さんと呑みに行くのは（笑）。結局吐くまで呑ませるんですよ彼は。で吐かないと不機嫌なんですよね。吐くと、「よく呑んでくれた」って涙流して喜ぶんですよ。

――迷惑な人ですね（笑）。

池上 迷惑ですよ、酒癖悪いからね（笑）。でも本当は淋しがり屋で優しい人でした。

――いろいろその当時の話は伝説のようにして我々も聞くんですが…。

池上 とにかくあの当時は作品でも彼の場合宮沢賢治のような作品描いてたけど、頭の中の半分は女の事で占めてたんじゃないかなあ（笑）。

――水木先生の本の後書きで、水木プロの中で「肛門愛の美学」とかいうのを持って歩いてる、と書かれてたんですが（笑）男の方はどうだったんでしょうね（笑）。

池上 稲垣足穂とか読んでましたからね、少年愛みたいな。稲垣足穂を「池上さんも読め読め」って言ってましたよ。熟読してましたよ（笑）。

――作品見てると少年愛的なのもあるかも…。

池上 でも女の方が好きだと思うけどね…翁二さんは…。

▽つげ義春さんのこと

――つげさんはどういう感じでした。

池上 つげさんは痩せてて、背も高かったからもてたと思うんだけど、自分から話しかけたりする人じゃないからね。一見弱々しく母性本能をくすぐるタイプなんじゃないですか？僕なんか優しい兄貴のように思ってましたけど…。こないだも電話したんですよ、僕耳鳴りが止まらなくて。これは二、三年治らないって医者からも言われたんだけど。山口君て友人がいてね、僕より後にアシスタントに入って、水木先生のところに八年くらい居て、今は青森に帰ってレンタルビデオ屋やってるんだけど、つげさんとの交流が長くて。彼が「つげさんも小さく耳鳴りするって言ってて、漢方薬を勧めてたよ」って言うもんだから、久々に…七・八年ぶりくらいに電話してみたんですよね。そしたら物凄く詳しいですね、病気に。物凄い知識ですよ。でいろいろアドバイス受けて。仕事しなくても食えるのであればしばらくやめた方がいいとかね。そういうわけで当分仕事はセーブ

▽本当は「希望なんか無いよ」と…

——水木さんの場合も自分の根本は「食う事だ」という事で、やっぱり飯を食う事が基本にある、と言ってますよね。

池上　やっぱりそれは変わらないと思いますよ。今の人たちは気付いていないだけで。60年代の頃は学生たちなんか物凄く貧乏だったでしょ。今はちょこちょこっとバイトすれば食えますからね。

——お互いある種いい加減に（笑）生きてても。

池上　だから全然時代が違いますよね。まあ今の時代が続けばそれはそれでいいんでしょうけど。必ず飽きるからね、人は。

——だから飽きてきて、一番尖鋭的に言えば戦争なんかに向かわなければいいんですけどね。でもこのままでは済まない感じはしますね。

池上　贅沢な悩みなんでしょうけどね。

——「食が基本」という話がありましたが今まさしく「飽食」な訳で。

池上　環境問題にしても、今日本が一番罪な事してる訳でしょ。金はあるけど。森林伐採の問題にしても。アマゾン流域にしても、一日に物凄い範囲が削られてるし、砂漠化も進んでる。だから安穏としてられない筈ですよね、学生でも。今もう地球的にものを見なければいけない時代なのに、企業の利益任せにしてるね、車だってもっと税金かけて生産落とさなきゃならないし、木が何とか言いながらも紙コップなんか使って全部燃やしてる訳でしょ。やってる事は矛盾してる訳だから最終的には環境問題に行くんじゃないかなと思いますよね。

——そういう中で、やはり希望を与えるような作品を…。

池上　本当は「希望なんか無いよ」って言いたいんだけどね（笑）。『ガロ』みたいにね。商業誌なんかでやってくれればいいんだけど、どうしても疲れた体を電車の中で束の間休めるためにあるんだから、余計疲れるようなもの読みたくないっていうのあるよね（笑）。

——仕事終わって電車の中で絶望したくない、という（笑）。

池上　そうそうそう（笑）。難しいけど『ガロ』はそれやれるからね。

——先生が最初に『ガロ』でやられたのもそういったものでしたし。

池上　あと、やっぱり今後は原作でやる以上は売れるものを描かなけりゃね。原作者に迷惑かかっちゃうし、やれるだけの事をやる、という事でね。昔の「フリーマン」みたいにエロは出さないように、と言われてるし。

——月並みですけど、『ガロ』に描いた何年か、というのは何だったんでしょう。

池上　やっぱり今描いてる漫画でも根っこにはあるんでしょうね。読者には解らないかも知れないけど。

——原点、というか。

池上　僕自身が最初から「陽」の部分しか持ってなければ、今の絵柄は出て来ないと思うんですよね。商業誌でも暗さを持ったキャラクターも出て来るし、主人公の目の憂いというか、一種陰のある目を描くとか、そういったものは『ガロ』で育んできたものだと思いますよね。

——暗部を知ってるから明るい部分が描ける、というか……。

池上　だから本宮（ひろ志）さんなんかは根っから明るい人なんだと思いますよね。ああいう人には僕はなれないから。『ガロ』に描いたからというより僕の性格じゃないですか。大阪時代の嫌だ嫌だと思いながら看板屋やってた頃とかね。

——その時にまさしく「これだ」と思ったのが『ガロ』であって、一致したという事でしょうか。

池上　そうですね。今の若い人だってやっぱり女性に恵まれてる人はそういないでしょうしね。灰色の青春時代を送っている人の方が多いでしょうしね。僕自身がそうでしたからね、暗い青春でしたから。

——今世の中豊かになって、お金持ってれば何でも出来ると言いますが、だからこそ、余計にお金持ってる人の方が少ないんですからね（笑）。

池上　そうですよね。僕自身はもっとエロチシズム的なものが好きなんですが、今は描き方をよほど注意しないと皆「有害図書」にひっかかっちゃうから、時期的に。

——凄く馬鹿馬鹿しい話ですよね。

池上　ええ、で本当は「家畜人ヤプー」みたいなのをやりたいんですよね、リアルな僕の絵で。

——ああ、いいですねえ。

池上　でもあんなのやったらそれこそ発禁みたいになっちゃうから（笑）。

——本当は誰も規制しちゃいけないものなんですけどね。

池上　まあ内容には関係ないけど、小池先生のでも、今やってる「サンクチュアリ」でも、「男の色気」みたいなのは出すようには描いてるんですけどね。本当は根の部分でそういうエロチシズムみたいなのを描きたいとは思ってるんですけどね。

——我々も是非見たいです。今日はお風邪のところ、本当に長い時間申し訳ありませんでした。

■収録　1992年6月10日　練馬区のアトリエにて
■文責　編集部

■自画像